

2021年1月27日

### 博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学  
研究科名 大学院人間科学研究科  
申請者氏名 川上 祐子  
学位の種類 博士（人間科学）  
論文題目（和文） 在宅看護教育における批判的思考態度を育成する TBL 授業の設計と効果  
論文題目（英文） Validation of Course Design of Team-Based Learning that Fosters  
Critical Thinking Attitudes in Home Nursing Education

#### 公開審査会

実施年月日・時間 2020年12月10日・15:00-16:00  
実施場所 Zoomによるオンライン開催

#### 論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士（人間科学）	大阪大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学 技術大学院大学	教育工学

論文審査委員会は、川上祐子氏による博士学位論文「在宅看護教育における批判的思考態度を育成する TBL 授業の設計と効果」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について 30 分間の発表があった。

#### 1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：スライド説明のうち「グループワークを行っても批判的思考態度が高まるわけではない」との記述があるが、これを具体的に説明してほしい。

回答：批判的思考態度の下位尺度得点は、受講前後で有意に上昇してはいるが、交差遅れ効果モデルによる検討の結果、協同効用からの影響が見られなかったため、このように説明した。

1.2 質問：交差遅れ効果モデルの説明において、協同効用から批判的思考態度への有意なパスが見られず、個人志向から批判的思考態度への有意なパスが見られたことは、平均の回帰による可能性がある。具体的には、協同効用が強かった人は、そもそもグループワークに有効性を感じているため、批判的思考態度も協同効用の効果

によって普遍的に高まり、かつ、批判的思考態度の影響を与えなかった。一方、個人志向の強かった人は、グループワークによって、その恩恵を強く感じることでより批判的思考態度へ影響を与えた可能性がある。

回答：交差遅れ効果モデルの考察に平均の回帰による可能性を追記する。

- 1.3 質問：各々の研究において、協同作業認識尺度を用いた理由について詳細に言及しているものの、それが本論文全体でどのような位置づけとなるかの解説が十分でない。本論の主要テーマである TBL の研究において「協同作業認識論的な研究がないから着目する」というその一文があるだけでも、大分説得力が高まる。

回答：本論文全体における協同作業認識尺度の位置づけについて序論に追記する。

- 1.4 質問：研究 4 のテキストマイニング分析において、語の最小出現数を 30 とした旨の記述があるが、この理由を説明してほしい。

回答：単語の最小出現数を 30 とした理由であるが、KH Coder 開発者の樋口によれば「多くの語を分析に用いると結果の確認が困難となるため、抽出語を選択する必要がある」と述べており、また、KH Coder では出力される語の数が 75 前後になるような、きりのよい数値（5 の倍数）が「最小出現数」として自動的に入力されるようになっている。そのため、本研究では、この方針に従い抽出語の最小出現数を 30 に設定した。この旨を追記する。

- 1.5 質問：研究 4 において、コーディングルールを定義し、コード数を測定しているが、定量的な分析のエビデンスとなるため、このルールは全て公開すべきである。

回答：コーディングルールを全て追記する。

- 1.6 質問：博論本体の引用に誤りがあるため、博論本文を修正すること。

回答：指摘箇所を修正する。

## 2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 交差遅れ効果モデルの検討に平均への回帰による影響を追記する。
- 2.1.2 本論文全体における協同作業認識の位置づけについて追記する。
- 2.1.3 計量テキスト分析における語の最小出現数の決定方針を追記する。
- 2.1.4 計量テキスト分析におけるコーディングルールの定義を全て追記する。
- 2.1.5 引用文献の誤った箇所を訂正する。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下のとおりの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 交差遅れ効果モデルの検討に平均への回帰による影響について、「第 1 節（研究 2）」の考察に加筆した。
- 2.2.2 本論文における協同作業認識の位置づけを「第 1 章序論」に加筆した。
- 2.2.3 計量テキスト分析 語の最小出現数の決定方針を「第 4 章結果」に加筆した。
- 2.2.4 計量テキスト分析 コーディングルールの定義を「第 4 章結果」に加筆した。
- 2.2.5 引用文献「第 1 章 3 項 p. 21 八重ほか」を「八重樫ほか」に訂正した。

### 3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、看護系大学の在宅看護教育における批判的思考態度の育成について検討することを目的としている。具体的には、在宅看護過程の授業を対象に、TBL を導入した授業モデルを検討し、批判的思考態度に与える影響、および、看護実践能力の修得状況を明らかにした。地域包括ケアシステムが推進される現代において、臨床判断の育成に向けた批判的思考力の向上、在宅看護教育の充実は重要なテーマであり、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、在宅看護教育に TBL を導入した授業モデルを検討した。協同作業認識や批判的思考態度に与える影響、および、看護実践能力の修得状況についてのデータ収集方法は明確に示されている。これらは、先行研究で妥当とされる分析手法で解析されている。以上より、本研究の方法論は妥当なものであると判断できる。
- なお、本論文の研究 2, 3, 4 では、授業実践を実施した看護系大学の研究倫理審査委員会の承認を得ており、対象者に対し、研究の趣旨、個人情報保護、研究参加の任意性および参加の有無は成績や評価と無関係であること、中断と同意撤回の自由など文書と口頭で十分な説明を行い、書面にて参加の同意を得て実践していることから、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、TBL を導入した在宅看護教育の効果的な授業モデルを明確な成果としてまとめられた。また、批判的思考態度を育成する支援方法として、TBL に足場かけの事前解説を導入することは、グループワークを促進させる点で有益な授業方略であることが明示された。これらの知見は、協同学習における TBL や批判的思考教育の先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当なものであると判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
- 3.4.1 社会情勢の変化に伴い、看護師は個別性の問題に対応し、総合的な看護ケアの提供が求められている。しかし、現在の看護学士課程の教育は、複雑な状況にある対象者を想定したものではない。また、在宅看護教育に関しては、看護理論や教育モデルが少なく研究は不十分であった。これに対して、本論文では、批判的思考力の向上を目的とする授業モデルに着目し、支援方法についての知見を提示した。これは従来にはない新たな視点であり、本研究の独創性として評価できる。
- 3.4.2 TBL を導入した授業では批判的思考態度が高まることを示した。しかしながら、授業前に協同効用の高かった学生のみ批判的思考態度が高まらなかった。そこで、足場かけの事前解説を導入したところ、協同効用の高かった学生に関しても批判的思考態度が高まること示された。これらは、ファシリテーターを代替するものと考えられ TBL の弱点を補完する授業モデルであることが期待される。このような状況において、本論文は、授業実践・調査を行い、効果的な支援についての知見を示した。これらの点は、従来にはない新たな視点であ

り、本研究の新規性として評価できる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本論文は、臨床判断の育成に向けた批判的思考力の向上という観点で、在宅看護教育の効果的な授業モデルについて知見を提供しており、この点において学術的意義があると考えられる。

3.5.2 本論文は、社会情勢の変化に対応する専門職として、看護実践に必要な批判的思考力の育成に対し、貢献できる具体的な知見を提供しており、この点において社会的意義があると考えられる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 批判的思考力および看護実践能力の育成は、人間科学の重要なテーマの一つである。本論文では、在宅看護教育の授業モデルについて新たな知見を提示しており、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.6.2 本論文では、在宅看護過程の授業実践における協同作業認識や批判的思考力、さらに、臨地実習後の看護実践能力の調査を実施した上で支援方法について新たな知見が示されている。人間を軸とした実践的な研究という点で、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

川上祐子，向後千春：2017 TBL(Team-Based Learning)とPBL(Problem-Based Learning)の違い. 日本教育工学会研究報告集，17巻4号，167-174頁.

川上祐子，向後千春：2019 TBL型在宅看護授業における協同作業に対する認識が批判的思考態度に与える影響. 日本教育工学会論文誌，43巻2号，139-149頁.

川上祐子，向後千春：(印刷中)チーム基盤型学習における足場かけの事前解説の提示が批判的思考態度に及ぼす効果. 人間科学研究，33(2).

川上祐子，中村康則，任和子，向後千春：2019 在宅看護実習における看護実践能力の修得状況—計量テキスト分析による検討—. 人間科学研究，32巻2号，157-169頁.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上